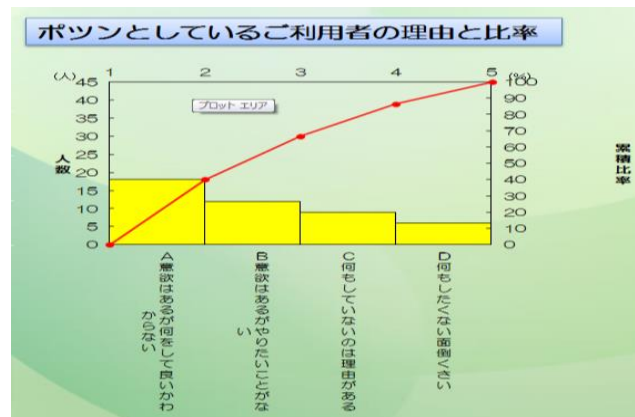
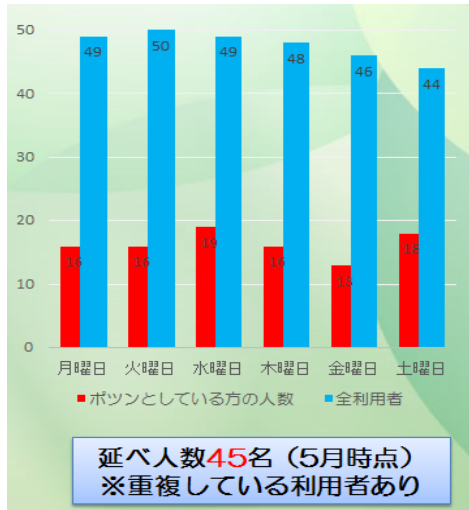


演題名	舟渡デイサービスにおける余暇時間の充実化		
施設名	舟渡高齢者在宅サービスセンター	発表者(職種)	くろさわ ひかる 黒沢 光 (介護福祉士)
チーム名	ざいせん		
取り組種別	問題解決型		
分類	①診断・治療・ケアの質の向上をめざすもの		
改善しようとした問題課題	1日平均42.5名のご利用者にサービス提供している。大規模デイにおける活動提供時間の合間などに生じる「余暇時間」の過ごし方について「何もしていないご利用者」が日頃より目立っている。1週間余暇時間に何もしていないご利用者を調査すると延べ36名に達する事が判明。そこでサービス提供時間全てを通して自立支援を行える仕組みや環境を構築し、余暇時間に何もしていないご利用者の解消を目指した。		
改善の指標とその目標値	(指 標)余暇時間に「何をしたら良いか解らない、何もする事がない」というご利用者が1週間で延べ36人いた。 (目標値)29人/36人中(80%)の問題を解消する。		
実施した対策	①余暇活動マニュアル作成(職員用)。 ②活動に取り組みやすい環境整備。 ③活動の選択肢の充実。 ④「ポツン対策ノート」の作成。 ⑤個別のニーズに沿った活動提供。		
改善指標の対策実施前後の変化	(実施前)余暇時間において「何もしていないご利用者」が1週間で延べ36人いた。 (実施後)マニュアル作成、環境整備、活動提供方法の改善を行い、更にアセスメントから評価を行える仕組みを作った事で32人/36人中(89%)の問題を解消する事ができた。		
歯止めと標準化	①標準化:ポツン対策ノート・マニュアルの定期的な見直し。 ②教育:ポツン対策ミーティングによる情報共有。 ③維持管理:物品の維持管理。		
活動の種類 ※複数選択可	①職場単位の活動	チーム メンバー (職種)	1 黒沢 光 介護福祉士
活動の場 ※複数選択可	④その他		2 米沢 明美 介護福祉士
活動期間	平成 29 年 4 月 ~ 12 月		3 琴寄 円佳 生活相談員
リーダー名 (職種)	中村 恭久 (介護福祉士)		4 千葉 貴史 生活相談員
活動回数	16 回		5 中村 恭久 介護福祉士

【現状把握】



- ①余暇時間に何もしていない方の人数を1週間調査。
- ②45名のご利用者に聞き取り。
- ③余暇時間に何もしていない主な理由を右の表のA~Dに分類する事が出来た。
- ④C(9名)を除く36名に対して対策を実施する。
※A・B・Dに属するご利用者を【ポツン】と言い換える。

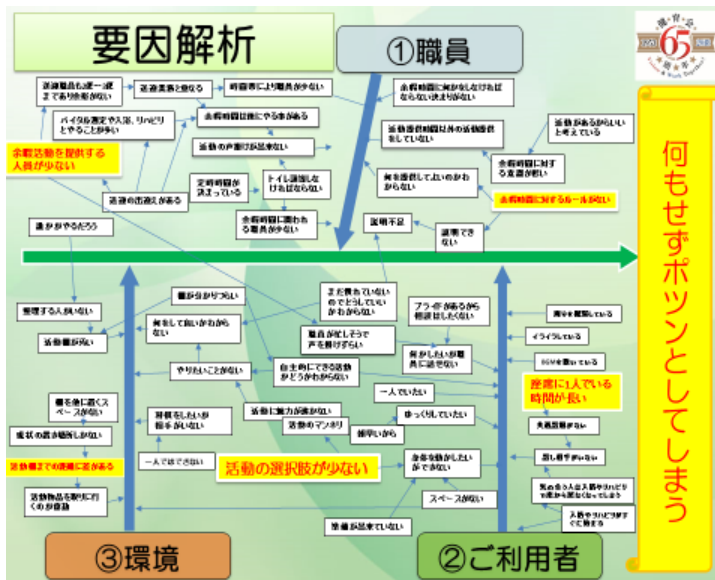
ポツンとしているご利用者を4つにカテゴリ分け

- A: 意欲はあるが何をして良いかわからない
 - B: 意欲はあるがやりたい事がない
 - C: 何もしていない理由がある
 - D: 何かをする意欲がない
- ※A・B・Dの人数 36/45人中

【目標設定】

余暇時間に何もしていないご利用者36人中29人(80%)の問題を解消する

【要因解析】



重要要因の検証

- ①「余暇時間に対する自立支援のルールがない」はマニュアルがない⇒真の要因と断定
- ②「余暇活動を提供する人員が少ない」は1週間職員の配置数を調査し人が多くいても活動を提供していない事が判明⇒真の要因ではないと断定
- ③「自立して行える活動の選択肢が少ない」は余暇時間に自立して行えている活動数を調査、3つの活動しか提供できていない事が判明⇒真の要因と断定
- ④「ご利用者と活動棚までの距離に差がある」は各テーブルごとの活動棚までの距離を調査、1番近くで30センチ、1番遠いテーブルで5メートルと距離に差がある事が判明⇒真の要因と断定
- ⑤「テーブルに一人である時間が長い」は一人である時間を調査、平均10分(最大20分)と短く他者がテーブルに居ても交流が見られていない方もいる事が判明⇒真の要因ではないと断定

重要要因として

- ①余暇時間に対する自立支援のルールがない
 - ②余暇活動を提供する人員が少ない
 - ③自立して行える活動の選択肢が少ない
 - ④ご利用者と活動棚までの距離に差がある
 - ⑤テーブルに利用者が1人である時間が長い
- の5項目が浮き彫りになる

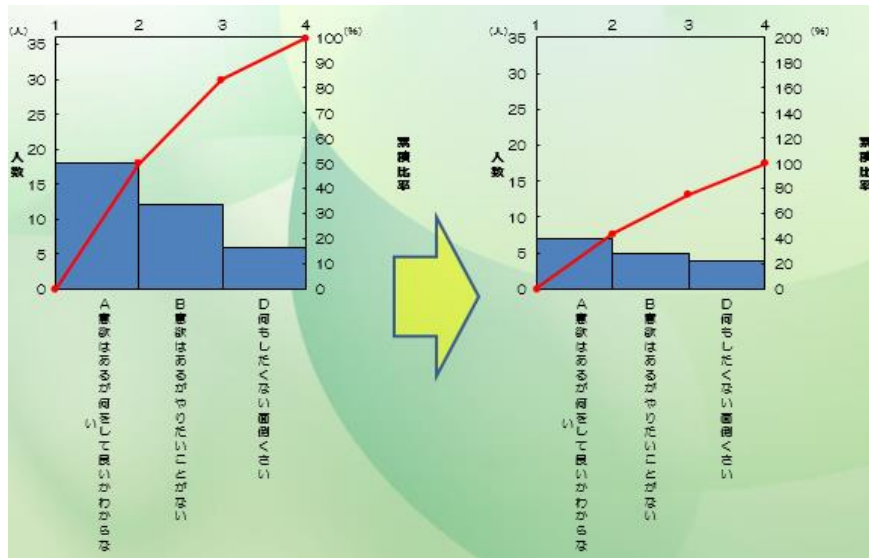
	重要要因	判定
①	余暇時間に対する自立支援のルールがない	○
②	余暇活動を提供する人員が少ない	×
③	ご利用者が自立して行える活動の選択肢が少ない	○
④	ご利用者と活動棚までの距離に差がある	○
⑤	テーブルにご利用者が1人である時間が長い	×

以上5点の重要要因の内①③④が真の要因と判明

【対策の立案と実施】

- ① 余暇時間に対する職員用のマニュアル作成
- ② 自立して音楽の活動が出来るようにピアノ、大正琴を置くスペースを確保
- ③ 体を動かす活動として手指、口腔体操、あやとりなどのファイルを作成
- ④ 脳トレの活動を増やすためにパズル知恵の輪などを購入
- ⑤ 美容、健康の活動を増やすため爪磨き、ハンドグリップなどを購入
- ⑥ 各テーブルに活動物品を置く事で活動棚まで行く手間を削除

【中間点検】



一定の効果は得られたものの達成率は53%と目標は未達成。
 15名の方がまだポツンとしているため、PDCAサイクルを回し未達成の15名に対し追加対策の立案、実施を行っていく。

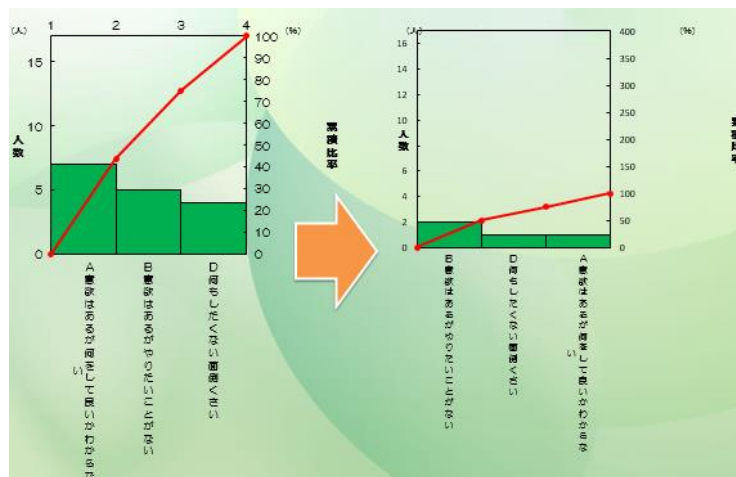
【追加対策の立案と実施】

活動物品を置いておくだけでは効果が薄く、声掛けや個別のケアが必要があり、アセスメント不足が浮き彫りとなる

- ① ポツン対策ノートを作成。
- ② 対象者に活動の声掛けをし提供した活動、効果をポツン対策ノートに記載⇒効果のあった活動を情報共有し提供していく。



【追加対策の効果の確認】

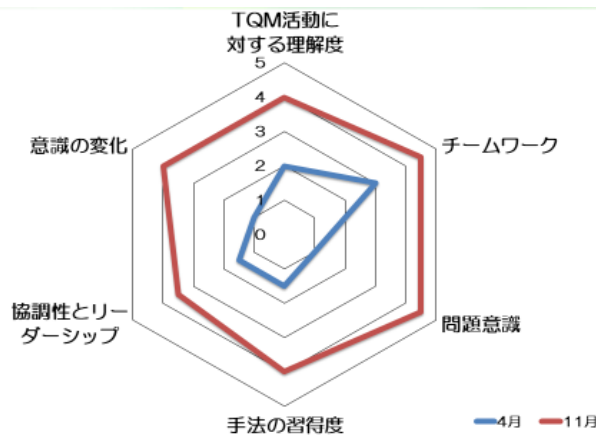


追加対策にて対象者15人中11人の問題を解消できトータルで36人中32人の問題を解消。
 達成率89%となり目標達成となる。

【波及効果】

- ①ご利用者の関心や興味を探るきっかけが出来た
- ②余暇時間帯にご利用者同士のコミュニケーションが生まれるきっかけになった
- ③ポツン対策ノートを使用する事で、その方をアセスメントすることが出来てモニタリングに活かすことが出来た
- ④効果のある活動を知る事で当日ではなく前日に活動を準備できるようになり職員の負担軽減、作業の効率化になった
- ⑤新規利用者に対しても余暇時間にする声掛けが増え活動を促す事でポツンとしないようにすることが出来た
- ⑥サービス提供時間全てで自立支援が行えるようになった

【無形効果】



- ①TQM活動に対する理解度…問題解決に向けた手法を学ぶことができた。
- ②チームワーク…ノートを使用する事で、情報共有が容易に出来、連帯感が生まれた。
- ③問題意識…余暇時間という盲点に着目したことで、サービスの質に対する意識が向上した。
- ④手法の習得度…要因解析を様々な視点で考える事が解決の糸口となるということを学べた。
- ⑤協調性とリーダーシップ…教室担当に役割を設ける事で、職員全体の協力体制を得る事が出来た。
- ⑥意識の変化…ご利用者の興味・関心を引き出すために、職員個々が情報収集を行うようになった。

【標準化と管理の定着化】

なぜ(目的)	何を(項目)	誰が(担当)	どこで(場所)	どうする(方法)	いつ(期間)	チェックする
標準化	ポツン対策マニュアル	黒沢	1F	見直し改定する	1年に1回	中村
	ポツン対策ノート	米沢	1F	見直し改定する	1カ月に1回	黒沢
教育	ポツン対策ミーティング	全員	1F	マニュアルを周知する	3カ月に1度	黒沢
維持管理	活動物品(非消耗品)	黒沢 中村	1F	物品を見直し必要な物は入れ替える	半年に1回	千葉
	活動物品(消耗品)	各活動担当	1F	少なくなった物を確認し補充する	毎日	米沢

【反省と今後の進め方】

		良かった点	悪かった点	今後の課題
P	テーマの選定	ご利用者の要望に沿ったテーマに出来た	なし	ご利用者のニーズに焦点を当てた活動を展開していく
	現状調査	なし	人数を把握するのに時間がかかってしまった	スケジュールの組み立てを早めに行う
	目標設定	なし	目標設定の根拠が弱かった	様々な視点から情報を集める
D	要因解析	要因を多角的に挙げて、真の要因を掘り下げる事ができた	なし	同様に様々な視点で要因を挙げていく
C	対策の立案実施	活動の選択肢を増やすことが出来て利用者満足が上がった	教室担当の手間が増えた	業務効率も意識した展開を検討していく
	効果の確認	ご利用者の活動の好みを知ることが出来て良かった	消耗品の準備について職員の意識統一が不十分であった	マニュアルの見直しを図る
	波及効果無形効果	ご利用者同士の交流が増えた	なし	興味や趣味を分析し、より楽しめる環境を整えていく
A	歯止めと標準化	マニュアルを作る事で、流れの周知ができた	なし	職員個々に意識の違いがある事が分かり、統一していきたい